

東ツアモツ群島における文化の実態

畑 中 幸 子

Reao-roa taha ia
はるかなるレアオ

taha ia i te uru
東風に向ってはるかにのびる

taha ia i te rae
岬はるかに

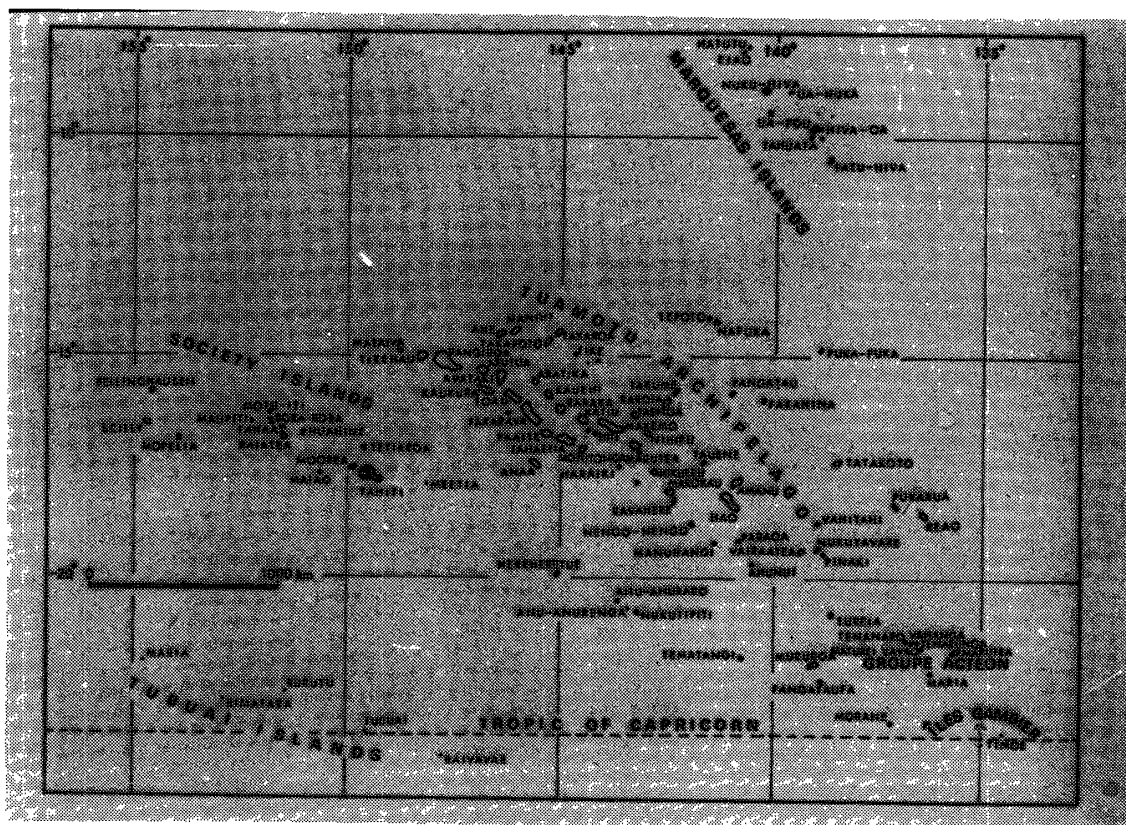
tei raro i te au o Niu-tu
南への潮路で、

tei raro i te au o Tetagi ia
北への潮路で

ka hotu, ka hara, ka tu, ka moe
樅子の実が辿りつく ここに安らぎをえよう

te igoa o taku fenua
わが島の名はレアオ

ko Reao-roa taha ia.
はるかなるレアオ



筆者がプカルア島でおこなった社会人類学の調査（1961－64年）とレアオ島で1976年、1980年に学際調査でおこなった“東ツアモツ群島へのポリネシア人の移住に関する研究”（科学研究費海外学術調査）の成果をもとに、信じがたい速さで姿を消した文化遺産、社会の変貌、民族解体の一途を辿るポリネシア人社会の実態をとこの小論文でとりあげたい。

フランスの核実験基地ムルロア環礁に近いレアオ島での調査は、交通手段の欠如、軍管轄下にあるためフィールドワークは非常に制約を受けた。レアオ島で許された時間内での調査故、資料が十分とはいえないが何よりも致命的であったことは意図した調査の時期が遅すぎたことであった。無文字民族であったポリネシア人の文化遺産は20世紀に入るや彼らの生活から姿を消し始めた。今日では口碑伝承の採集も辛うじて2、3のインフォーマントにとどまるほど困難であった。我々6名の団員は人類学、文化人類学、心理学、言語学、考古学の分野から困難な研究に挑戦した。この小論文では報告書（英文）をもとにして言い尽くせなかったことも含めて論述を進める。

はじめに

仏領ポリネシアのツアモツ群島の東端にあるレアオ島は、行政府のあるタヒチ島から約1,400km 離れ南緯18°28′、西経138°48′の位置にある。隣接のプカルア島とは約48km 離れている。レアオ島は北西から南東に長さ約20km、幅2.5kmで中心に礁湖^{ラグーン}をもち暗礁^{リーフ}に縁どられた典型的な環礁^{アトール}である。島の北東側はトケラウと呼ばれ地続きに長く延びており、椰子林が続く。一方、南西側は数珠状に並んだ40以上の小島（モツ）群でケレテキと呼ばれ、島民の手近かな漁場でもある。年間の平均気温は26度で強い東よりの風（平均ビューフォート4）が常に吹き快適な海洋性気候である。東ポリネシアでは一年のうち240日が晴天で、風の凪いでいる（ビューフォート2～3）日は37日とされている（Danielsson 1956:25）。近年は異常現象が続いており、雨の降らない季節にかなりの雨量があったり一定とはいえないが、1980年の年間雨量は1643ミリであった。5月から10月までは雨量は少く、8月は26ミリであった（Service Météorologique de L'Aviation Civile en Polynésie Française, 1980）。

レアオ島唯一の村タプアラバ Tapuarava は島の北西部にあり、230人（3人はタヒチ人の学校教師、1980年）の住民が住む。島社会の常であるが、人口は船便のある度に変動が大きい。レアオ島でも移住先の判明している不在者が島の人口とほぼ同数に達していた。

筆者がレアオ島に注目したのはプカルア島と同様、島民の身体的特徴といい、言語といいツアモツ群島の中でユニークな位置にあったことである。このことは19世紀以来、ヨーロッパ人航海者やミッシヨナリーの注目をひいてきた。両島は外界から長く孤立していたため、ヨーロッパ人との混血もなくタヒチ島のみならず他のツアモツ群島の人びとからも屢々異民族扱いされていた（Ottino 1965）。ポリネシア人の東ポリネシアにおける移動の中心はソサエティ諸島、あるいはマルケサス諸島にあるとされ、ツアモツ群島の島民もこの

何れかの火山島からの移住とされてきた。ツアモツ群島はタヒチ島の北東から弧をえがき南東に約1,700kmに延びる大群島である。東端のレアオ・プカルア両島を火山島に近い西ツアモツ群島と同様に考えることはできない。筆者はレアオ・プカルア両島が何度かの移住の波にあらわれており、しかも両島より更に東の方に移住したポリネシア人グループとの関わりがあるのではないかと考えた。というのも18～19世紀にヨーロッパ人の太平洋探検で帆船がとった航路—南緯27度前後を西風を利用—をそれ以前にポリネシア人が移住にとった可能性があるからである。事実、レアオ島とイースター島との間に19世紀半ばまで往来があったことが伝えられている(Seurat 1905)。ポリネシア研究で最も知られている人類学者ピーター・バググ(Te Rangi Hiroa)は、マンガレヴァ島の調査を終えその帰途に1936年にレアオに3か月滞在した。彼は島民の身長が低く、短かくて幅のある顔に鼻幅が広い初期のポリネシア人の特徴をあげて注目し、レアオ島の人びとが比較的早い時期に移住してきたことを示唆している(Buck 1959:191)。これに先がけてビショップ博物館のツアモツ群島調査隊(1929-31)が両島にも上陸、短期間であったが滞在し、考古学上の遺跡のリスト作成とチャントの蒐集をおこなった。成果の中で筆者が注目するのはE.バローのチャントの調査とF.スティムソンの口碑伝承の採集である。バローは同じリフレインのある短いスタンザに特徴を見出し、短い音程やはっきりしない抑揚など原始的な特徴をレアオのチャントに見出した(Burrows 1933)。

言葉については、レアオ島で話されていた土語(方言)が他の島々の方言と非常に異なっていたことは、既に19世紀半ばレアオ島で布教につとめたカソリックのH.オードラン神父の単語の比較からも明らかであった。1930年代に布教のためレアオ島にいたP.マゼ神父もレアオ語のユニークな位置づけを筆者に強調した(1962)。ビショップ博物館調査隊の言語調査を担当したF.スティムソンは研究の結果、レアオ語をマランガイ Marangai 語群に位置づけた。マランガイ語群はタタコトからバヒタヒ、ヌクタバケ、マンガレヴァ島の北西部に散在する島々を含んでいる。彼はレアオ、プカルア両島の方言を Marangai-kokeko と分類した。形質人類学の立場からレアオ人を見ると Pietruszewsky の分析した第三の集団—ニュージーランド、ハワイ、イースター島、孤立した島々を含む—to プカルア、レアオ両島民は位置づけられるのではないかと考えられる。我々のレアオ島の調査は1976年に始められたがビショップ博物館調査隊が上陸して以来、約半世紀の年月を経ている。筆者は隊員の唯一人の生存者K.エモリー博士の厚意で目を通すことの出来た調査隊のフィールドノートからみて、1930年前後がレアオ島での言語や口碑伝承の蒐集の最後のチャンスであったことを認識した。ビショップ調査隊の滞在中に集めた情報をもとにして我々は調査を進めた。その時、予期せずしてチャントがまだ残っていることを発見した。1977年(スミスソニアン研究所緊急人類学調査委員会の援助による)、1979年(トヨタ財団の助成金による)に筆者はレアオ島に単身戻り、残っているチャントの採集にあたった。古老

たちの協力でチャントの採集は予期しなかった数に達した。文化変容の下で文化遺産であるチャントが今日まで残ったというのは島の地理的な孤立に負うところが大きい。チャントの社会的通俗性と感情表現の意義が人びとをひきつけていたといえる(畑中1980: 284)。チャントは今日、レアオ島、東ポリネシアにおけるポリネシア人の唯一の文化遺産といえる。数少ない島のタフガ(=賢者)といわれているテアカ・タイレリュウら古老の外に、1934~56年までレアオ島の癩療養所で働いていたタヒチ人看護夫・^{アンフィルミエ}ピエール・フィウ氏の協力で、ある程度までレアオ島の伝統文化を掘り出すことができた。彼らがレアオ島に関する最後のインフォーマントであった。

無文字社会の歴史—歴史的背景—

D. オリヴァーによるとポリネシア人の移住で最も重要なことは、年中東から吹いている風が年に一度10~15日という短い期間であるが西から東へ風向が変わることにあるという(Oliver 1962: 7)。この期間を利用してポリネシア人は太平洋を東へ進んだ。これはソサエティ諸島やマルケサス諸島など東ポリネシアにおける移動の中心について考えられてきたことである。しかし、すべての移住についてこのルートを想定することは出来ない。先に述べたように南回帰線の南を規則的に吹いている北西あるいは西からの風を利用した移住も考えられるからである。イースター島(ラパヌイ)と関係があるとされているラパ島(ラパイチ)は南緯27度にあり、直接西からの移住の波に何度か洗われたと考えられる。イースター島と東ツアモツ群島、マンガレヴァ島との往来は口碑伝承によっても知られている。19世紀後半、フランスの博物学者L. G. スーラが東ツアモツ群島で調査中、ハオ島でレアオ島から来ていた古老に会い、19世紀初頭にイースター島から航海用カヌーでレアオ島へ往来があったことを聞いている(Seurat 1905)。

ポリネシア人の航海の方法は、(1)夕暮れと夜明けにおける水平線上の星をガイドにする、(2)星座のコンパス、(3)太陽の位置、ウィンド・コンパス、(4)天頂の星、(5)うねり、海流の方向、(6)島上の雲、(7)島の飛ぶ方角の利用などがあった。

註1

1979年、筆者がマンガレヴァ島でタフガ(賢者) Marcel Mauru 氏からえた情報では、かつてマンガレヴァ島からラパヌイに移住した人がおり、その子孫がカソリックミッションの到来する直前にマンガレヴァ島に戻って来た。彼らの一人が系図を暗誦できたため殺害を免れ居住を許されたという。時は18世紀末と推定される。マンガレヴァ島群を含む東部ツアモツ群島の人びとにはヘンダーソン、ピトケアン、イースター島との接触が十分考えられるのである。東ツアモツ群島は仏領ポリネシアにおけるカソリック教会の伝道の出発点であるが、原住民の文化、社会に関しては上陸地であるマンガレヴァ島を除いて記録を殆ど残していない。東ツアモツ群島の19世紀半ばの状況はマンガレヴァ島の民族誌から一つの

手がかりがえられる。マンガレヴァ島に人が住みだしたのは、1900年から遡って26世代、1250年頃にいたツルレイに始まる(Buck 1938)。口碑伝承によるとマンガレヴァ島の一地方から種族間の戦いに敗れたアリキ(首長)を含む避難者たちが東ツアモツ群島のいくつかの島々に7隻のカヌーで逃げてきた(Caillot 1910:384)。しかしレアオに逃げてきたかどうか疑問である。たとえ辿り着いたとしても現在のレアオ島民の先祖ではない。19世紀半ばまでツアモツ群島の東部島々の間でかなりの移動があった。今日まで伝えられているのはタタコト島と近隣の島々との戦いが絶えなかったことである。タタコト軍に敗れたプカルア島民は虐殺を免がれるためにレアオ島へ逃げ込んだ。やがてレアオと連合して彼らは再びタタコトと戦っている。タタコトのカイトーカヴェラはレアオに攻撃をしかけ、二せきのカヌーで Faretemarama と Teaumotu に上陸した。一せきのカヌーには約20人の戦士が乗っていたという。プカルア島はこの戦いの後も約半世紀間無人島であった(畑中1977)。苛酷な自然環境の下にある小さな環礁での部族社会の発展は容易ではなかった。恐らく人口の増加、あるいは地下から飲料水が十分えられない時には、生存のため人々は居住地を求めて他の環礁を侵略しなければならなかったであろう。東ツアモツ群島のレアオ、プカルア、タタコトでは移動に用いられた伝統的な型のカヌーが20世紀初期まで見られた。レアオのカヌーは丸木舟の底部と側面部から出来ており、孔をあけ縄を通して縫合せた古い型のカヌーに根本的に類似していた (Haddon & Hornell 1936)。レアオ島への最初の移住者について、あるいは移住の過程について知ることは困難である。キリスト教の到来後、口碑伝承が逸早く消滅したため現在の住民は彼ら自身を部族の先祖と結びつけることが出来ない。レアオ島からも何人かずつ離島したことが伝えられている。今日までに断片的に残されている口碑伝承やヨーロッパ人航海者の日誌によるとレアオからの離島者の多くは恐らくプカルアへの帰島者であったと考えられる。19世紀に他島からレアオ島にやって来た人びとは永住しなかった。彼らはツアモツ群島の中部あるいは西部の島々から来たといわれている。彼らはケレテキ側、つまり小島群に居住を認められそこにマラエも残している。カソリックミッションと接触する以前は、タヒチ人はツアモツ群島でもハオ島以南の島は知らなかった。こうしてレアオ島は長い間の孤立から住民は彼ら自身の社会を発展させていった。レアオ島はヨーロッパ人に発見される以前はタフナチキと呼ばれた。この名は古いチャントに謳われているが、チキ(神像)が波間に出たり隠れたりしていることを意味する。タフナチキという名が固有名詞として広く近隣の島々の人に呼ばれたかどうかは不明である。

東ポリネシア社会ではヨーロッパ人と接触する以前にアリキ(ariki)と呼ばれる首長が各部族にあってリーダーシップをとり、別にカイトー(kaito)と呼ばれる武将がいた。辛うじて採集できた口碑伝承によるとレアオにはマヒチというアリキとタイホプというカイトーがいた。この二人は初めてミッションナリーがマンガレヴァ島に上陸した1834年には生存して

おり、現在のレアオ島民が口にする先祖でもある。ヘケチニという所に住んでいたタイホプはタタコトとの戦いに出向き主将として活躍した。タイホプより年長であったマヒチは高齢のためこの戦いに参加しなかった。戦いを機会にタイホプがマヒチよりはるかに力をもつに至ったことは、20世紀初めにレアオ島民からE. カイヨーに語られたマヒチの伝記でも明らかである(Caillat 1932)。人びとの口にされるタタコトとの戦いでは、タタコトの武将カベラについての物語や武器の一種であるマカについての歌が今に伝えられている。マカは直径が10cmのボール状のもので周りに紐をかけて振り廻わし、敵の頭を目がけて投げないのである。南米インディアンのボーラーを思わせる。レアオ島民はプカルアを‘非常に近い’を意味するテマウピリと呼んでいた。両島の距離が僅か48kmにすぎないことからレアオ島民が偶然にプカルア島を発見したとも考えられる。

ヨーロッパ人で最初のレアオ島発見者は、L. ドゥペリー船長で1823年に上陸している。彼はクレルモン・ドゥ・トンネルという長い名をつけた。これはウィルソン船長によるプカルアの発見より26年先がけている。ドゥペリー船長がレアオ島を発見した時、かなりの住民が村・モヒツにいたことは口碑伝承のみでなく考古学の調査からも裏付けられている。その3年後、ビーチ船長がマンガレヴァ島よりレアオに着き、当時の模様を伝えている。レアオで話されている言葉が同類の言葉にちがいないが、マンガレヴァの言葉と全く異なっていること、プカルアとレアオの住民が同種であること―濃色の皮膚の色をしており、頭は髷に髪を結っており、入墨や身体装飾が乏しいこと―が記述されている。住民が手にしていた武器は長さ20フィートのポールで、フレンドリー諸島(=トンガ諸島)のものによく似ていること、重々しそうな棍棒をもっていたことも述べている(Beechy 1831: 147-150)。それから13年後にデュモン・ドゥルビーユ船長が南太平洋への第2次航海でレアオ島に着いた時、槍をもった全裸の住民を見ている。どの航海者も衣類をまとった住民は見ておらず、時には女が僅かであるが腰に何かをまとっていた程度である。当時、島はパンダヌスに覆われており椰子の木はまばらにしか生えていなかったようである。1839年C. ウィルクス船長に率いられた米国の探検隊(1838-42年)がレアオ島についた。‘マオリ族の通訳がコミュニケーションを試みたが島民に受け入れられず上陸は不可能であった。島民たちは長い槍や棍棒を振りまわし敵意をあからさまに表わした。通訳が交渉にあたり、言ったことは相手に理解された。えられた返事は5~6人の者が同時に叫んだ次のような言葉であった“自分の土地に帰れ、この島は我々のものだ。お前たちと何の関係も持ちたくない”と。島民たちに友人であることを信じさせるため、頼み綱に贈物を彼らに投げたところ、彼らはすべての物を必死で取りあつた。しかし島民は尚も我々の上陸を拒否し、長い槍で脅しつづけた……’(Wilkes 1849: 125)。ウィルクス船長もレアオ・プカルア島民とフレンドリー諸島の島民との類似をあげている。これは東ツアモツ群島に残存しているチャントにババウ(トンガ諸島の小島嶼群)が故郷として繰返し出ていること(Caillot 1910)

と合せて興味を抱かされる。筆者がレアオで採集したチャントンの中にもババウが謳われている。

レアオやプカルアに限らず環礁の生活は常に饑餓の不安がつきまとう。大洋の中にあり、陸の資源が非常に乏しいからである。半世紀前ごろの生活は魚類、しゃこ貝 (tridacna)、カメ、パンダヌスの果実、ポケア (Portulaca johuii) と僅かなココ椰子であった。ヨーロッパ人がレアオ島を発見した時には家畜 (豚、鶏、犬) はいなかった。10月から1月にかけて hanu と呼ばれる漁期があり、この時は魚群が環礁の水路から礁湖に入ってくる。島中の者が協同労働で漁撈に参加する。魚群を岸边に囲い込むようにして槍、網を使用する外、手摺みでもとる。魚の季節外れを paroro といい、この時には礁湖の小魚やしゃこ貝に食糧を依存した。無盡蔵に見える礁湖のしゃこ貝もアリキによりラファイ制度を設けられ、食糧資源の計画的消費がはかられた。ラファイはある範囲を決めてそこからの採取を禁じたもので、それに従って住民は居住地を移し、2～3年後に元の場所に戻ったという。島の北西部から始められトケラウ、ケレテキに同時にラファイは適用された。レアオ島は外洋に対して閉じた環礁であるため真珠貝 (Pinctada maculata) がとれない。釣針は専らカメの腹甲、mikimiki (Penphes acidula) と呼ばれる硬質の木や時にはあこや貝も利用された。カメの季節は7月から12月にかけてで、その肉は最も賞味されるだけでなく儀礼にとっても重要であった。神への犠牲としてカメが捧げられた。レアオのマラエ・テアレロの前面に外洋に向かって1.2×1.5×1.5mの大きさに珊瑚 (coral slab) が積まれているこれはスーラによるとツアモツ群島で屢々見られたという (Seurat 1905: 307.) これは小型祭壇のようなもので、ここでカメの到来を神に祈って呪文を唱えたという。カメを見つけ祭壇から離れて捕えに行く男に以下のような呪文が与えられた。

He manava, he manava !	おお神よ、われらに恵みを給え
he tetoko, he tetoko !	いづこそ! いづこそ!
ke higa mai korua tahaki nuku	陸に向ってくれまいか
ke fono mai korua tahaki nuka	陸に近づいてくれまいか
ke hoa ia ki te tua o Atea	神の国で大きなひびきを立て
tei hea te puna nei	カメはいずこにその姿を
tena, tena te puna	カメはそこに姿を現わす
tei hea Takurua ma Takero e puna	タクルアとタケロはいづこそ
teie Takurua ma Takero e puna	ここにタクルアとタケロが姿を
kotaha um mea te manu	赤い胸を見せつつコタハが舞う
e putai' i takare rika tu to tira	流れるカヌーに近づきマストから舞上る
kauraka ho mai o maru ki kite	二匹のカメをまもり給え

tiraki o mata ragia

fakarua, hakatere ki te nuku

kia tau e

大きな目を空に向けて

風が陸にみちびく

カメよ、来たれ陸に

カメが捕獲された時、人びとは歌い踊った。カメは先づ頭を切られ神へ生贄として捧げられた。料理された肉は男たちの間で分配された。こうしてカメの肉はマラエで神と分けあうが、女・子供たちにはタブーであった。マラエの前面にある広場からカメの頭骨をはじめ多くの骨が魚骨と共に出土している。カメの腹甲は耕作用スベードとして根茎類タロ (Colocasia esculenta) やカペ (Alocasia macrorrhiza) の栽培に使用された。事実、我々のタロピット(kauai)の発掘で腹甲製のスベードが多く発見された。伝統的な歌が殆ど失なわれた中でカメとか魚釣りの歌が比較的人びとに思い出されるのは日常生活の仕事の大きな部分を占めていたからであろう。

レアオにおける椰子の植林は主としてミッシヨナリーによるもので、それまではパンダタスの実が唯一の植物性の食糧であった。パンダヌスはその果実 kahui から澱粉質がとりだせ、それを料理し乾燥させると数か月間保存ができる。果実は年中とれないため保存が考えられたようである。又これは航海用の食糧にもされた。今日、島のどこをとってみても椰子に覆われているが、20世紀初め頃はスクナーが来島してもコブラの出荷は7～8個のバスケット分で、煙草、小麦粉との交換がやっとであったという。当時、椰子の実は食用としては貴重でラファイ制度が適用された。その頃、スクナーは4か月毎にコブラの回収に来島した。島民は入手した小麦粉を一度に全部料理し、それを世帯 utuafare 毎に分配した。外来の物質をうる唯一の手段であるコブラ生産のため、日常に椰子の実を口にすることは極端に制限された。人口が増加するにつれ殺伐とした情況に至ったことが今に伝えられている。カソリックミッションの奨めで住民は契約の労働移民として妻子同伴でマカテアの燐鉍採掘に、あるいはタヒチ島やムルロア島のプランテーションに2～3年の契約で出かけた。1920年前後のことである。レアオ島民が中部ツアモツ群島以遠に出かけた最初のケースである。コブラ生産が増すにつれ住民の食糧状況はよくなり週一度小麦粉を材料にしたイポが食膳に上った。食物を常に求めている人びと—foraging people の常であるが、食事の回数などは決まっていない。食物があり次第である。当時のレアオの人口は750人前後であった。他の環礁に比較して人口が大きいことから初期の移住が一時的なものでなかったことが察せられる。

20世紀初め頃まで住民はきびしい環境の中で根茎栽培を行っていた。タロイモは収穫まで8か月、カペは2年近くかかるため、人びとは年中収穫があるように栽培した。300以上に上る kauai の遺跡からも察せられるように当時のかなりの人口が推定される。カペはタロイモとは別に植えられた。J. バローによるとカペは大体において西ポリネシア

のトンガやサモアで栽培されてきたものである(Barrau 1961)。kauaiはV字型に水面レベルまで掘り、更に30 cm掘る。タロイモを植えつける前に toatoa(*Pisonia grandis*)などの落葉を入れる。収穫が悪くなるまで同じ kauai を使用する。レアオの kauaiはその大きさといい、数といいツアモツ群島の何れの島にも例をみない。ミッシヨナリーの奨励にもかかわらず、根茎栽培が途絶えたのは椰子の実と小麦粉の登場による。人びとは時間と労力のかかる環礁での根茎栽培に消極的になり、ハリケーンで kauai が被害を蒙ったり、あるいは害虫の発生をきっかけに遂に放棄してしまった。

レアオには多くの井戸 kehaga があり、飲料水として利用されうる。これが大勢の人間の移住を可能にした第一条件ともいえる。又古い時代から人が住んでいたことが察せられるのは、現在の住民が全く知らない墓があちこちにあることである。ケレテキの小島ツパクにもかなりの墓がかたまっている。海水をかぶっているため corab slab で出来た石棺の中にはサンゴ礫が多く入っており人骨は破損されている、しかし墓の中から貝製のペンダントや釣針が発見された。P.フィウ氏によるとプーハラにある墳墓はミッシヨナリーが来た当時の住民にすらわからず、相当古いものだという。トケラウ側の方がケレテキ側よりも墳墓群が多いが、殆どが盗掘状態になっており、盗掘の動機に苦しむ。ビショップ博物館調査隊以外には島内を歩いた者がいないことから外来者よりもむしろ、現在の住民の祖先がキリスト教に改宗した時の行為として考えられる。盗掘状況から見て何世紀も昔とは考えられず、多くの開かれた棺の中に一片の人骨も残っていないことは、人びとがキリスト教徒のみが人間であると説いたミッシヨナリーの下で彼らの先祖を神の座から野蠻な悪魔の座に落としたことと関係がありそうである。ケレテキのマラエの近くで発見された人骨は焼かれたものであった。レアオで発見された多く墓墳群は謎ともいえる。

社会変化の過程

東ツアモツ群島はフランスの保護領になった後、間もなく政府が行政をカソリックミッシヨンに委託していた。1880年フランス植民地に併合され、初めて地方行政が施行された。僅かなコブラ以外に何の資源もない遠隔の一環礁レアオは政府の関心をひくこともなかった。レアオは孤立しながらも、ようやくその名がタヒチ島で知られるようになったのは、1925年、1934年の二度にわたるハンセン氏病の流行である。最初の流行時には二村のうちの一村が村ぐるみでタヒチ島のオロハラ療養所に送られ、大勢の者が帰島しなかった。このグループに口碑伝承や系図をひそかに伝えていた古老が何人かいたという。1963年、筆者が訪ねた時は病状のためコミュニケーションが不可能であった。二度目の流行ではレアオに療養所が建てられ、オロハラから一人の看護夫 (infirmier) が派遣された。この人がピエール・フィウ氏であった。レアオの療養所にはプカルアをはじめ近隣の島からも患者が送られ、1934年には90名の患者がいた。レアオ療養所にはフランス政府だけでなく米国のモル

モン教会に属する団体から救援物資が続けて船で送られてきた。この時レアオ住民は初めて外国の食品—粉ミルク、砂糖、米、魚肉類の缶詰—に接した。これより外来の食糧への強い慾求が生まれた。

ポリネシア社会と一口にいても火山島と珊瑚礁では著しく生活が異なる。厳しい環礁の自然が人間の居住を制限し、居住後も社会組織に影響を与えたことは否定できない。ハリケーンで椰子の被害が大きいと離島者が続いた。現住民の記憶に残るものでは1906年、1908年のハリケーンがある。人びとは倒れた椰子の幹で筏 (paepae) を組んだ。4艘の筏と両側にアウトリッガーのついたカヌーでバヒタヒ、ヌクタバケ、アキアキ、ヒクエルに辿りついている。彼らはレアオに戻ってこなかった。今日に至るまで他島からレアオへの移住者は稀である。ミッシヨナリーとの接触以前にスペイン船から下されたルルツ島（オーストラル諸島）の少年がアリキ・タイホプの養子になったケースがある。ヌツアモツ群島のタカポトからモエアバという男がレアオに上陸して居住が認められ、ケレテキにマラエを残しているが何時の頃か離島した。子孫がハオ、タカポト、ナプカに住んでいるがマラエのある土地の所有権は既に消滅している。コブラスクーナーが来島し始めた頃、マケモからマイファノが上陸してレアオで結婚し、多くの子孫を残している。今日レアオ島の大家族の一つである。一方1920年頃、沖を通過する外国船から煙草を入手するため、椰子の実を積んだカヌーで交換に出かけ漂流した男がいる。船を追跡しているうちに海流に流され島の位置を見失ったのである。カヌーは漂流中に他の貨物船に発見され、この男はクック諸島（ニュージーランド領）のラロトンガで下された。当地でレアオの言葉でコミュニケーションが出来たところから漂流者はレアオに妻子を残していたが、ラロトンガに永住したという。近年のレアオへの移住といえば他島から来た若手の配偶者を除けば、タヒチ島からの中国人（華人）たちである。彼らはコブラの仲買人で永住しなかったが子孫を残している。その他、西ツアモツ群島からコブラ生産を目的に来島した一家族がいるが、レアオで土地を確保するため家族のメンバーが交替で居住している。

カソリックミッシヨンの奨励でレアオ島民はツアモツ群島の南東部アクテオン グループにある無人島のマリア、テナニア、マツレイヴァヴァオでの椰子の植林やムルロアのフランス人所有のプランテーションに2～3年の契約で働きに出た。契約労働を終え、帰途マンガレヴァ島に定住した者もある。アクテオン グループの開拓はレアオとプカルアが単位として生まれ、1956年に政府の援助でミッシヨナリーの指導の下に再び植林が続けられた。1918年と1923年の二回にわたりマカテアの燐鉱採掘の人夫募集がレアオ、プカルアにあり40人近くが妻子同伴で契約労働に出かけた。レアオ島民はマカテアであちこちから来ている他島の人びとと接触した。彼らはクック諸島の人びととのコミュニケーションの方がタヒチ人とのコミュニケーションより容易であったという。彼らはマカテアで聞いた他島の口碑伝承やチャントをレアオに持ち帰っている。

レアオには古くはモヒツとタパガ（ヘケチニ）という村があったが、1877年、カソリックミッションがタブアラバに教会を建て人びとをその周辺に住ませた。モヒツには1930年代まで人びとが居住していた。モヒツ出土の遺物の層や量からも長年の居住地であったことが明らかになった。東ポリネシアの島の中には19世紀にヨーロッパ人により疫病がもたらされ、島によっては絶滅寸前までの人口減少が余儀なくされた。孤立状態であったレアオやプカルアはそのような被害は免れている。

椰子の木の集中的な植林によりコブラ生産が上るにつれ、スクーターの来島が増した。その便を利用してレアオから人びとが出かけて行った。今世紀初めのハリケーンで離島した人びとの子孫がいる島々に出かけた。それ故、中部ツアモツ群島以遠には及ばなかった。姻戚のいる島、兄弟姉妹が結婚で居住している島なども含まれた。近年では若者のハエレ・オリ・ハエレ（目的もなく出かける旅）が圧倒的に多かった。レアオ社会では島民が相互に親族・姻族の何れかに、時には両者ともつながる関係で配偶者の選択に限界がきたこと、タヒチの若者と同様に性の冒険を求めることも島を出ていく動機である。若者のことをタヒチ語でタウアレアレというが、タウは時期をアレアレは陽気とか歓楽を意味する。彼らは歌ったり踊ったり、異性と楽しむ時期として社会的にも容認されているのである。1980年、若者のうち男性は殆ど島におらず、33人がタヒチ、ハオ、ムルロアに出稼ぎに出ていた。核実験が始まってからは家族ぐるみでタヒチへ移住する人びとがふえた。レアオ島在住者と判名している不在者の数がほぼ同数であった。他に若者32人がハエレ・オリ・ハエレで出かけていた。このような状況がレアオ島内での労働力不足を生み、コブラ生産による島の経済開発に深刻な問題を与えた。コブラのトン当りの買付け価格は政府援助で市場価格の倍近くで買いあげられているにもかかわらず、1970年の336トンから1980年の200トンに出荷量が減っている。一方、タヒチへ出てしまった者の半数以上は消息が正確に掴めない。一部はパペーテ（仏領ポリネシアの行政の中心で且つ港町）の町外れにレアオ・コミュニティーを作り共同生活をしているが、一体何人いるのか正確な数字は誰もいえなかった。物価高のタヒチではある程度の収入なくしては生活は不可能である。文盲、公用語フランス語の話せない者、技術をもたない者には仕事は殆どない。狭い空間に集ってその日暮らしのレアオ・コミュニティーはスラム化しつつあるのが現状である。窃盗や傷害事件で刑務所で服役しているレアオの人間で、耳にした名前だけでも5～6人に及んだ。近代的な町の生活に憧れて周辺の島々から出てきた人びとは、帰島してコブラ生産に従事し十分な収入をうることを奨めるツアモツ・ガンビエル行政局や教会の忠告にもかかわらず、一向に帰る様子はなく、逆にツアモツ群島からタヒチへの移住者はあとを断たない。タヒチの人口は加速度的に増加しているのが現状である。

1966年にレアオに核実験の観測基地が建設され島民人口の民族構成を大きく変えた。以前に混血といえは数人の中国人との混血 demi-chinois であったが、今や在住人口 (de facto)

の24パーセントが白人（外人部隊の兵隊）との混血である。20年前、筆者がプカルアで調査していた頃はレアオでは中国人との混血が子供を含めて4～5人であったが、現在では以下に示す如く変化している。

レアオ住民の民族構成

民 族 集 団	非混血	3/4	1/2	1/4	0	不 明	計
レ ア オ 人	143	21	55	2	5	1	227
ツ ア モ ツ 人	2	1	15	6	202	1	〃
タ ヒ チ 人	0	0	6	2	218	1	〃
他のポリネシア人	0	0	9	6	211	1	〃
マンガレヴァ人	0	0	3	7	216	1	〃
中 国 人(華人)	0	0	2	7	217	1	〃
ヨ ー ロ ッ パ 人	0	0	24	0	202	1	〃
黒 人	0	0	1	0	225	1	〃



祭日にはフランス兵も村に出て休日を楽しむ

descent group 血縁集団に関してはツアモツ群島でも西部と東部では著しく異なっている。西部では島は matakeinaga（地方の意）に分けられ、その土地への最初の移住者の子孫から成る集団を 'ati、あるいは ngati と呼んでいた。'ati は地縁と血縁をかねた集団で、親族集団としてだけでなく居住集団としても重要であった。レアオでは 'ati もなければ ngati もない。パイオニア・ミッシヨナリーとしてレアオで布教につとめたマゼ神父もレアオには存在しなかったという。レアオにおける descent group は固有名詞で、例えば pupu Nihitu とか、pupu Teaonui と呼ばれた。pupu は部族にまでのびる大家族を意味するほか、タヒチでも古くは

paternal descent group)に対して用いられた。50才以上の人びとは descent groupに対して pupu という語を用いている。現在レアオには11の pupu があり、その中の4つはプカルアの descent groupと密接な関係がある。レアオの人びとは遠い祖先に対して tumu (起原、根の意) という語を用いるが、tumu につながる確かな系図を述べることは出来ない。しかし、bilateral society であるにもかかわらず、tumu にあたる先祖は皆、男性であることは注目される。イースター島では住民が定義も明確にしないままに tumu がつかわれているが、現地調査をおこなったA. メトローによると tumu は父方の descent groupを意味しているようである(Métrax 1940: 122)。レアオの名門は三つの大家族 Mahiti, Tearo, Teaka で、これらの家族が大部分の土地を所有している。Mahiti はアリキ・マヒチの子孫であり、Tearoと Teaka はカイトー・タイホプの子孫である。父系の子孫につながっていく tumu にはそれぞれ呼称がある。例えば Tuna i te niu, Tutavake i hukiと Manini i tanuである。これらの tumu は19世紀初に生存していたアリキ・マヒチから5世代さか上ったところから始まっている。tumu がレアオにおける最初の居住者であったかどうかは不明である。キリスト教の到来前は、神々とその名が部族を表わす名祖の間に系譜関係が存在していた(Buck 1938: 62)。これはポリネシア全般にわたっていえることである。レアオではチャントの中で名祖とおぼしき名を聞くことができる。レアオの古い人名は東ポリネシアの中でもユニークであるが、最近の住民では多くの者がツアモツ群島の一般的な名前や洗礼名の土語訛を好んで付けている。

レアオのタフガ(賢者)、テアカ・タイレリュウからのみ系図に関する情報がえられたが、それは彼自身の血縁集団に限られたものであった。テアカは tumu のテアオヌイには6つの系統を通してつながり、別に3つの親族集団とつながりをもっている。経済活動を共にする集団 corporate groupは一定の居住地に住み土地を共有、メンバーが使用したり利用したりする権利をもつ物質的資源をも共有する集団である。環礁の不毛の地もコプラを生む椰子の植林が始まるや土地に commercial valueが出てきた。ナポレオン法典をもとにしたフランスの法律が1918年、レアオ島民にも適用された。不動産申告に応じておきた土地の法的分割は住民たちに混乱を惹き起こした。土地は個人名義で登録されたものの彼らの死後、書き改められることなく2~3世代経ていた。descent groupで共有していた土地だけに土地登録者が死亡した時、先祖返りをして細分化されていた土地が再び descent groupの共有となった。人びとの間ではフランスの法律にかかわらず土地はあくまでも pupu のものであった。コプラの需要に従って市場経済とのかかわりが増大したその頃から所有権をめぐる土地が住民の間で問題になりだした。それは‘コプラ・ランド’、つまり椰子の木が植えられているか、将来植林の可能性のある土地であった。不動産である土地の登録時(1919年)の人口に比較してどの corporate groupもメンバーが増加していたことも大きな問題であった。細分化された土地は再分割が不可能な場合も生じた。こ



コプラ生産に希望を見出したレアオ島民

の10年以來政府の補助があり、コプラからの収入は以前とは比較にならぬ程増し、島民の生活水準は上った。レアオにおける共有地は急速に減りだした。同時に非單系血縁集團 non-unilineal descent group の原則にもとづく親族間の連帯間識が崩れだした。これは土地所有制度の崩壊に起因していた。コプラの出荷からかなりの現金収入が入りだすと兄弟姉妹間でさえ共有地が分割されるようになった。経済的連帯がきれるや居住のパターンにも変化がおきた。1980年では45世帯のうち複合家族 compound family は12世帯にすぎなくなった。伝統的な里子の習慣も社会変化により影響を免れなかった。養子制度とはちがった里親制度はポリネシアに広く見られる習慣で様々な動機や理由があった。それは子無しの人の熱望、親族間の絆の強化、親族間や友人間での友情の確認や連帯の強化、経済的な理由からの親族間の相互扶助、経済活動における労働力の確保などであった。もし子供たちが成人する前に両親を失くした時には世帯は解体し、彼らは里親 makui fagai の所に行くのが常であった。1976年の調査時では47人の子供が里親の所で起居していた。18家族が子供を1人、あるいはそれ以上里子に出していた。私生児は一般に祖父母によって養育されたり、子無しの夫婦に引きとられた。近年の行政で里子に対して1人1か月2,000フラン (Pacific franc) の養育費を里親が申請できることになった。扶助を受けられる里子は里親の兄弟姉妹の子は該当しないが、伝統的な里子制度は性格を変えていくといえる。最近では白人との混血児が里子に好まれる。混血の私生児には里親の希望者が多く、子供の生活は問題なかった。小さな島社会で経済の変化が伝統的なポリネシア人社会の存続に最後のとどめをさしたといえる。

唯一の文化遺産

社会の変貌が加速度的に早められていったレアオ社会で残存しているポリネシア人の文化遺産とは何か。東ポリネシアの人びとが文化遺産の殆どすべてを失くして久しいが、レアオもその轍を歩んだといえる。事実、レアオの人びとは ethnic identity を明確にする自国語 vernacular を失ってしまった。その言語を我々は古いチャントの中から聞くことができ、且つ19世紀末のオードラン神父により記録された語彙から知りえたのである。

チャントは口碑伝承の中で非常に重要である。口から口への口伝えは途切れることなく、又多くの物語が散文になって歌われているため保存されるものである。無文字民族にとってチャントは民族の叙事詩であり、祖先に対する賛歌、挽歌、祈願、英雄賛歌、物語である。チャントの中には神話、あるいは歴史的な物語からの挿話に関係しているものもある。そのためこれらは失くなってしまった文化要素を知る手がかりを与えてくれる。このことは多くのポリネシアの島々でいえることであった。レアオでは現住民の先祖が口伝えにしてきたチャントに手が加えられたり、改められた部分があることは否定できない。しかし、文化変容をおこし何も残っていない所でチャントが今日まで辛うじて残っていたというのは、チャントの情緒のあるメロディーが多くの人びとに愛されてきたからであろう。口ずまされるチャントが何について謳われているのか主題が辛うじて言えても、もはや言葉の逐語訳はできない。従来のポリネシア研究の中でチャントの研究は特別にとりあげられたことがなかった。民族誌や研究論文の中で音楽として記述されているに過ぎない。

レアオ島に残されていたポリネシア人の文化遺産はチャントの外に巨石文化 megalithic cultureの流れをくむ石造建築物のマラエがある。今や両者とも人びとの関心から外れてしまった存在である。植民地では原住民の近代化への憧れは強く、経済・社会変化の中で伝統文化が消えていくことはポリネシアに限らない。とりわけ文字で記録を残せなかった無文字社会では外来の文化要素、中でもキリスト教への改宗により伝統文化の破壊は自らの手でおこなっていた。航海民族ポリネシア人の外来文化に対する姿勢はどことも柔軟でキリスト教も全般的にすんなり受容している。キリスト教布教は異質の文化背景の下で発達した宗教を異文化の社会にも導入し、且つそれ自体の文化価値をもたらした。ポリネシア人の神々の死は計り知れない程の変化をポリネシア人社会にもたらした。それは宗教から始まって社会の解体にまで及び、口碑伝承、芸術、技術の破壊にまで迫った（畑中 1981: 79）。ポリネシアでは神々と名祖の間に系譜関係が存在していたことは既に述べたが、口碑伝承はこの系譜とは無関係でありえない。系譜の抹殺、祖先以来儀礼をおこなってきたマラエの破壊は初期のミッシヨナリーの下で、たとえ見せかけにしろ改宗した島民の手によってなされた。予期せずして東ツアモツ群島のレアオ、プカルア、タタコトにチャントが残存していたのは島の地理的な孤立に負うところが大きい。1960年代に筆者がプカルアで聞いたチャントが20年経た今日、急速に姿を消しつつあるというのは、人びとが彼ら自

身の言葉を急速に失くしていること、軍の基地建設による第二波の外来文化のインパクト、彼らが自身の文化にもはや関心も愛着もなくなったことに負うといえる。

S.エルバートはポリネジアン・アウト라이어であるレンネル・ペロナ両島で集めたチャントを3つのカテゴリーに分けた。それは儀礼的歓迎の辞、挽歌、タウント(たわむれ)である。両島民がキリスト教を受け入れたのは1938年で、南太平洋諸島中では新しい。しかし儀礼に関するチャントだけは完全に消滅していたという。この種のチャントは系図をはじめ島への移住に関するものなど民族の紋事詩が多い。そこでは挽歌は古老たちに思い出され、なお歌われているという。タウントは新しく入った媒介のギターなどを用い若い人びとにとりあげられてきたが、このチャントにはより強い情緒的なインパクトが加わっていた。レアオでは50年前、E.バローやF.スティムソンが訪れた時、チャントの採集はもとより、筆写も翻訳も可能であった。島での滞在が短いためバローは14のチャントのみ採集して島を離れている。バローは音楽としての関心から採集しており、チャントの大部分は翻訳されずにそのままになっていた。当時でもレアオ島を離れての翻訳は困難であったろう。1930年代に入るとコプラの出荷量が増し、スクーターの来島も増した。レアオ人たちの出入りもあって、この頃からタヒチ文化一二、三流の西欧文化一が直接・間接にレアオに入ってきた。レアオ語が他島の人びとに通じないこと、物質文化が貧しく生活水準が低いことからタヒチ人に蔑視され、レアオ島民は外部の人びとに対して劣等感をもつに至った。レアオでは方言を出来るだけ話さないよう子供たちはしつけられた。半世紀前の話である。レアオの人びとが接していたツアモツ群島の方言がとり入れられ、lingua franca が話されるようになった。1961~64年、筆者が調査していた頃はレアオ語、ツアモツ方言、タヒチ語が混合して話されていた。20年後の今日、レアオ語が消え、ツアモツ方言、タヒチ語にフランス語が入りみだれて話し言葉となっていた。チャントは古老も誰一人として歌わなくなっていた。

E.バローによるとチャントの構成は言葉の大部分が二重の意味、即ち瞬時的な表現と隠され内在する意味から成っている。後者は非常にエロティックな意味をもつという。レアオではバローがツアモツ群島の多くの島で採集したほどチャントに種類はない。tuatau, one, putu, tini, cro, patakutaku, teki, nanau, anau, manava はレアオになく、共通にあるものは fagu, hakateni, fakatagi (fakatara), haka-ariki (haka), rogorogo, がある。レアオにはその他に tarava, paripari, patau (tike), pehetoro がある。古老もチャントに対してこのような名称は聞いたことがあるものの、もはや分類することは出来ない。チャントは元来、社会的機能に従って分類されていた。レアオのチャントは挽歌、賛歌、数え歌が主である。他島に比較して目立つことは数え歌が豊富なことである。儀礼のチャントは消えていたが、儀礼的な歓迎の辞などはその形式をとどめ、公的な訪問者に歓迎式で島民が集って献上していた。遠い祖先の名前—ポリネシア神話に屢々出てくる—いくつかの

チャントの中に現われる。この種のチャントは古ポリネシア語とみられるレアオ方言で謳われているため翻訳は非常に困難である。先づ日本語や英語の意味に置きかえることが困難である。大意がえられても逐語訳はその適当な言葉を見つけることが殆ど不可能である。我々のインフォーマントがカテゴリーも大意すらも説明できないで詠唱するチャントも多かった。大意が聞きえたものは *lingua franca* で謳われているものである。チャントのインフォーマントは非常に限られた上、何れも60才以上である。彼らが子供の頃、老人たちが集まって詠唱していたのを傍で聴いていただけである。メロディーはともかく、歌詞に至ってはうら覚えである。スティムソンの採集したチャントの中には、我々のインフォーマントが謳えても若干の言葉がタヒチ語におきかえられているものもある。我々のインフォーマントがチャントに関心があったわけではなく、単に歌うことが好きなポリネシア人の天性に負うといえる。

レアオのチャントは調子や韻律の抑揚要素が非常に単純で朗読と音楽そのものとの間にあり、どっちつかずである。チャントに出てくる言葉の多くは隠れた意味をもつのが普通である。万物の始まりにさか上り起源を神まで辿っていく。移住者の祖先たちは神につながる。チャントの中 *fagu* は神々、英雄、故郷について詠唱される儀式ばった厳粛なチャントである外、亡くなった者への哀歌、挽歌も含まれている。その言葉が神話的な主題に及んでいる時でさえ、これらのチャントは普通超時間的な情緒内容をもつ。レアオに残っている *fagu* の多くは挽歌であり、コーラスで歌われる。バローによるとレアオの *fagu* はツアモツ群島の他の島々のそれとは音楽的には全く異なっているという。10余りの短いスタンザから成り、各スタンザの語は主題（主に人名）に続いて数のみが変わっているのである。数え歌には *rogorogo* や *pehetoro* と判別が付きかねるものもある。筆者は *rogorgo* や *pehetoro* は分類というよりもむしろ型式と受けとれた。いくつかの *fagu* をあげてみよう。ここに出てくる人名は恐らく先祖の名で神々の末裔とされていたことが察せられる。この中には今日のレアオの大家族の名前も出てくる。

*Ka tahi nei ka taea Ria e	はじめにリアがあらわれ
no te fare i motu	木を伐り、家をたてる
ruru na te tagata	人びとはつどいくる
na Nihitu, na Tuhoe, na Tehakukiri	ニヒツ、ツホエ、テハクキリ
te igoa te vaka, ko te Kaha-mata-tini	カヌーの名はカハマトチニ
ka kave ki uta, ki uta te henua	岸に押し 陸にあげる
ki uta Tearero	テアレロのマラエまで
ka tau metua, ko Teao, ko Tetama	祖先が天下る

ko Teahuotoga	テアオ、テタマ、テハウオトガ
haka ara ko te mata, te mata o te atua !	目ざめよ、神々の眼！
ko Tetauira, ko Temiki, ko Tepirianu	テタウイラ、テミキ、テピリアヌ
ko Tetaehaeia, ko Tetaimaeva	テタエバエイア、テタイマエバ
ko Tetairutua, Temoko-inu-tai	テタイルツア、テモコイヌタイ
ko Tematahao, i i.	テマタハオよ。

*Ka tahi ki ruga o ruapo	やみの世界の上方から一つ
fatifati nuku i mavae rahi	ひだが破れだし、天空がひらく
e muri vahine no te tio, te tio	後向いている女のお尻、お尻がでる
ka maraga nanu te tio, te tio	お尻がもち上り、動き出す
e ri e ro.	あれよ、あれよ。

*Tui ko koia tera uke rahi take	一条の光りが闇の空からいでぬ
ka mate te raki i raki i raro a huri	古い墓場に死が安らぐ
oro' oro komo hoi tana rua	墓場からかすかな水のささやき
ahu ake ahu ake toro ku tana	黄泉の国へ、黄泉の国へ
tuki ake papa	しじまのひろがる闇に安らぐ
ahu ake ahu ake noho ru	黄泉の国へ、黄泉の国へ
e ri e ro.	安らぎを求めん、あゝ、あゝ。

*Turinoriki ma te mate noa e	あゝ、幼な子が逝った
e tiu atu hoki ei tua	はるかなる国へ
i te maru no Havaiki e e	ハワイキの闇の中に
turinoriki ma te mate noa e	あゝ、幼な子が逝った
kapokapo ra a te manava au e	つきせぬ歎き悲しみよ
garo te tama i garo	いとし子が去っていく、あゝ、
garo ki te ara taku e	去っていく、はるか彼方に
ua garo te tama e	いとし子が去ってしまった
anoano ra a Havaiki ^{註2} e.	はるかなるくに、ハワイキへ

大方の場合、チャントの歌い出しは hua と呼ばれる一人の者が、それを受ける者で時には高音部を歌う maro がいて他の者が合唱で続くという形式をとっている。レアオには火を作るときのチャントが豊富である。この種のチャントは、P. フィウによると fakatagi か

fakateniに属するという。ハンディによるとポリネシア人の生活においてチャントの重要な機能は呪文や祈願に力を加えることである(Handy 1927)。生活に密着した内容をもつチャントは人びとに好まれ、日頃口ずさまれていたためか、筆者がプカルアで調査していた頃は人びとの記憶に甦っていた。

* Mata mata kau nati, mata mata kahi	火をおこそう、木粉がでだす
ko te ahi aru, ka tutu ha maru	木に火がつく、そっと移そう
tui te tumu rei, ua kite au mata mata	火つけ木をおいて、さあ、しめた
mata mata toko rau mea, mata mata kahi	北に向って粉がとぶ
ko te ahi aru, ka tutu ha maru	木に火がつく、そっと移そう
tui te tumu rei, ua kite au mata mata	火つけ木をおいて、さあ、しめた
mata mata toga mea, mata mata kahi	南に向って粉がとぶ
ko te ahi aru, ka tutu ha maru	木に火がつく、そっと移そう
tui te tumu rei, ua kite au mata mata.	元の木をおいて、さあ しめた。

fakatagi(fakatarā)は賞賛、故郷の自然への賛辞、あるいは土地の名を歌いあげる。fakatagiは、カヌーのような財産の所有を称えて詠唱されることもあった。fakatagiは20年前はフランス人行政長官の来島にあたり歓迎式で歌われていた。このチャントには村の周辺の地名が詠いあげられている。かつて、チャントの分類は内容もさることながら詠い方が大きな特徴を与えていたと思われるが現在では区別が付きがたい。

* Taku moe i nanea, taku moe i nanave	深いねむりにおち、まどろむ
taku moe i haka ara hia	やがてクリリに目ざめる
e kuriri te manu tai navenave	鳥が喜々として羽ばたく
ka napanapa te tai Tuverohia	タベロヒアのまばゆさ
te ara i Peregaihe ra e	ペレガイへにつづく道
o Teroma e	テロマよ
o Teroma tena, o Terahu	テロマにつづくテラフ、ニウピアコ
o Teniupiako, o Tegakohonu	ガコホヌ、テプアキリキリ
Tepuakiririkiri	ポウレバのマラエよ
e marae Poureva tahua Fareroa	ファレロアの広場
tika haga no taku reva e.	われら 船出をまつ。

次にあげるのは鰹釣りの時に詠われ、古くから人びとに好まれてきたという。歌い方に

はかなり外来音楽の影響を受けているが、言葉はレアオ方言である。しかしこのチャントはスーラによると前世紀に中部ツァモツ群島のハオでも謳われていた。

*Tohora nui a turu koropaga	大きな鯨がうかび上る
mai turu gugu, mai tu rere	背をうかばせ、背をしずませ
kau mere kau mere oti	外側にうねり、内側にうねり
ko te ui tapa ki te rahi	うねりうねって しずまる
ka rupe i ama e, ka rupe i ka tea	空に一条の光（水）をなげる
tuau i tua takahi a	大きく左にゆれ、大きく右にゆれ
ka pue i te vahi garuerue	一条の光が空をきる
puehuehu te tai o tohora	ふくんだ水を吐きだす
kia mau kia mau te iroiro	鯨が汐を吐きだす
kia mau kia mau te iroiro.	カツオの群を追っている。

tarava は英雄や名祖の賛美に歌われるチャントであるが、一本調子の単調なものである。他島から来た人びとの歓迎や儀礼の折に謳われる。tarava はツァモツ群島の中でレアオ独特のもので、且つ豊富であった。来島者の歓迎行事でも屢々歌われてきた。チャントの中で名祖の名を次々代えて謳い、最後に歓迎者の名を入れて謳う。

*E ariki tuiro o Tahuka Tuata	偉大なるアリキよ、タフカ・ツァタ
e ariki no Marupua e	マルプアのアリキよ
e marae tera i Ahutu e	あれはアフツのマラエ
e heiau ra a i reira e.	そこに集いの場あり。
*Tu te tira ma te fara	帆柱に帆桁をつけ
haka tika to kie	帆を真直ぐはる
e pua ra te nono e	ノノの繁る
e kamara e nunui e Vavau	火の燃ゆる偉大なるババウ
e pua ra te nono e	ノノの繁る
te Ruahatu i tana pahi	ルアハツが帆をあげる
te ahi ri paka	彼のすぐれた力を頼りに
tena peu rikiriki	水をくみだす
kapokapo te arofa	船は暗礁をのりこえる
tana pahi kia tupatu	彼は漕ぐ
tana hoe te rivaiva iti e.	しぶきをあげながら。

hakateni は祖先や人物を賞めそやした賛辞、英雄頌詩である。tarava と hakateni はその内容に区別がつかねるが、hakateni はかつてカイトー（武将）の前で謳われたという。島毎に、あるいは名門の家族は自身の hakateni をもっていた。hakateni の吟唱は tarava と異なっているのは驚くような速さでテンポが変わっていくことにある。上記のチャントがレアオで伝えられてきたとすると、Vavau が問題になる。火山島となるとトンガ諸島の Vavau が考えられるのである。Paripari も土地や故郷への賛歌である。これは繰返し手で拍子をとりながら謳われる。

*E fenua ra i te puroro

Reao roa tahuna ia e

ua hake taha na tiki

ua tika Reao roa taha ia

tika haga no Taihopu

tu te hau ariki e.

風が島に吹きつけてくる

レアオはそこに横たわる

チキが波間に姿を消し

レアオが浮かび、はるかにのびる

偉大なるアリキ・タイホプ

岸辺にいでぬ。

我々の調査中、haka-ariki はもはや採集できなかったが、バローによると言葉はアリキの称号が与えられる男が就任する儀式にちなんだもので、踊りもアリキの超自然的な一時的な力を確認するためという。短いスタンザに長い折返し句のある型はレアオのチャントに共通してみられる。この折返しは何度もそのまま繰り返され、屢々スタンザ自体よりも長いことが多い (Burrow ibid. 32)。レアオのチャントの中で最もユニークといえるのは数え歌でその数が多いことである。これも短いスタンザといった特徴をもつが、そこにおさまる語は数に限らず列挙される一連のものであり、風、鳥の名、身体の部分や家屋の部分が謳いあげられる。この型式をふむものを pehetoro と呼ばれる。系図を謳いあげる rogo-rogo については、もはや誰も思い出せなかった。恐らくキリスト教への改宗後、一番先に消えたチャントであったかと察せられる。

*Te hua te kenahio

koia haka oti a

e manu pekepeke

e te manu peke atu

e te manu peke mai

e te manu roro a

te rua manu, te rua manu

roro a.

ケナヒオが巣ごもる

卵を産みおえて

鳥は羽ばたく

鳥は行きつ

戻りつ

輪をえがきつ飛ぶ

やがて巣をめざし

舞い下りてくる。

鳥の名 kenahioが kotuku, kotaha, goio, kirahu と種々の鳥の名に変えて謳われる。一古老が一語一語の意味はわからないが、pehetoroの代表的なものに次のチャントを謳った。uruは体全体をさすが、この語のみが額、目、鼻、口、顎、手、肩、胸、顔、背、へそ、尻、膝、足、足指にまで変えて謳われる。

*E. kura e taku uru	さあ、体を見せよう
e kura ha o rii rii i	すべてをあけて
e kura e ahu ahu kura ha (bis.)	一つ一つ 見せよう (繰返し)
o rii rii i	さあ、
e kura e tahiti i tahiti	順をおって見せよう
na ruga na raro	上に、下に
ahu ahu kura ha	先づ見せよう
o rii rii i	さあ、
a hahere kui i.	どんなもの!

teki は1人又は2～3人の小人数でゆっくりしたテンポで謳われ、歌い出しのソロはない。tekiにはエロティックなセンスをもつものもあるが、遠廻しに表現しふざけた言葉で結ぶため聞いている者は爆笑する。レアオでは相手を侮辱する言葉としてセックスに関する言葉が多いことから察せられるが、猥褻な言葉が非常に発達しており、日常茶飯時にもよく出る。チャントの中でも屢々出てくるが、これらの言葉に二重の意味をもたせているため解釈が困難である。以上に挙げたチャントに対して筆者は、H. オードラン神父のレアオ語集の外にスティムソンのツアモツ方言辞典、ハワイ語、タヒチ語、マオリ語、サモア語、マルケサス語の辞典を頼りに仮に訳したものである。

今日の住民からチャントの機能について明確な説明をうることは出来なかった。しかしバローの調査によるとかってチャントには次のような機能があったとされている。1) 詠唱者の興奮や感動の表現でそれを聴衆にわかちあう。その感動は宗教的な感情の高揚が多かったと考えられる。2) 呪文による呪術的な効力をわかちあたえること、3) 仕事への結束とその喜びの表現、4) 様々な教訓をチャントに含ませ、謳うことにより記憶づける。そのためスタンザ、あるいは区切りが標語で終ったり次の出だしの言葉として意味をもたせるものがある。5) 出来事を告げる、6) 生産や感謝を通して、純粹に審美的な楽しみや宴会に謳われる(Bunows ibid.56)。古いチャントになると小さな音程とはっきりしない音調が原始的な印象を与える。レアオのチャントの特徴は、同じ歌のスタンザのメロディーに見られる多様性である。

チャントはすべて忘却の彼方にいってしまったが、今日でも人びとの間で喜怒哀楽は難

なく歌になっていく。ポリネシア人の替歌^{かえうた}や変曲はよく知られていることである。レアオの文化でも歌うこと、詠唱は‘偶発的なもの’と説明される。人びとが興奮した時には何時でも歌になるということである。約70年前にレアオに入ってきたタヒチの音楽ヒメネーギターに合せて歌われ、西欧の音楽の影響が強い—が歌い出されて以来チャントは歌われなくなった。レアオでの替歌には外から入ってくる音楽はタヒチ音楽だけでなく、とりわけ讃美歌の影響が伺える。ツアモツ群島でもタヒチに近い島々では、主題は伝来のものであるがメロディーは西洋音楽といったモダン・チャントが人びとに愛好されている。レアオでも音程の短い従来のチャントに代って近代チャントも既に生まれていた。昔のチャントの歌詞が新しい言葉—ツアモツ方言かタヒチ語—に替えられているもの、近代チャントとして歌詞はレアオ方言でありながらメロディーが西洋的になっているものもあった。近代チャントは中年以上の人なら、かなりの人が歌える。村で時折、口ずさんでいるのが聞かれた。恋歌が多い。子供、親、故郷に対して愛情こめて歌われるものなど情緒的なものが好まれている。筆者が集めた100に余るチャントの整理には時間がかかる上、比較言語学上からの検討など言語学者の協力を必要としている。

民族の運命 —結びにかえて—

ポリネシア人はメラネシア人と比較してヨーロッパ人と接触してきた時間の長さや頻度が異なる。ポリネシア人が開放的でホスピタリティーに富んでいたことは、多くの西欧の航海者が日誌に留めている。とりわけ密度の濃い接触は1780～1850年に太平洋で活躍した捕鯨業者たちとであった。1850年代には数百の捕鯨船が活躍し、捕鯨のシーズン・オフには船員たちがポリネシアの島々に上陸していた。彼らは外来者に敵意を示すメラネシアの島々への寄港をさけ、水、果物の豊かなポリネシアの島々を選んだ(畑中 1981: 78)。東ポリネシアのタヒチ島ではヨーロッパ人との混血が急激に進みその後、労働移民として華南から来た中国人との混血が加わった。南太平洋航路の重要な港町、タヒチ島のパペーテは各国人種の往来がありその結果、20世紀半ばには第三の民族タヒチ人が生まれていた。言葉も近年急速な勢いで失くしつつあり、ハワイ人やマオリ人と同じ運命を辿っている。彼らにはポリネシア人としての ethnic identity は殆どなくなってしまう、フランスの行政下でタヒチ島への愛着から辛うじてタヒチ人という identity を保っている。人によってはフランス人という identity をもつに至っている。

西ツアモツ群島は古くからタヒチ島との交流がありヨーロッパ人との接触も早かった。これらの島々の住民は早くからコプラ生産を始めており、タヒチ島との往来で同じ民族の運命をになっていた。東端・遠隔のレアオ島はタヒチから約 1400 km 離れているため西欧の物質文化も巡回のミッシヨナリーを経て入ってくるに過ぎなかった。1920年代から外部との接

触が始まり、30年代にはコプラ・スクーターが年に二度程、来島するようになった。第二次世界大戦で再び孤立したが、戦後は太平洋の他の多くの島々と同様、コプラの需要に応じてレアオも市場経済に入ったのである。スクーターの来島は2か月に1回から毎月1回となり、仲買人である中国人がレアオに入れ代り立ち代り来て店を開いた。経済の変化よりも、むしろコミュニケーション、交通手段の登場がレアオの住民に大きな影響を与えた。島民が島から出ていく機会が増したことの意味は大きい。タヒチ島には、もはやポリネシアン・ホスピタリティーは存在せず現金なしではよそ者は暮らせなかった。そのため1960年以前はタヒチの病院に送られる病人と付添を除いて出かける者はいなかった。先にも述べたようにレアオ住民の旅先はツアモツ群島の中部の島々、マンガレヴァ島など縁者のいる所に限られた。特に若者の島からの流出は大きい。1960年代の前半まではレアオからのコプラの出荷は少く、島民の生活水準は低くその日暮らしの生活に甘んじていた。レアオから出ていく者がいても外からの移住者はいなかった。他島で配偶者をえた若者はレアオへは殆ど帰ってこなかった。

レアオでの言葉はツアモツ方言とタヒチ語のlingua francaであり、会話に出てくるレアオ語は数えるほどであった。himene tahito（古い歌）を知っていた人も歌の訳はもはや出来なかった。先祖から習ったチャントのメロディーを愛したまでだった。

レアオ島社会の劇的変化は、1960年後半のフランス核実験センターの観測基地が設けられ外人部隊が駐屯したことに始まる。かつては見なかった人種混血が始まり、短期間に混血児が増加した。最果てのポリネシア人の島、レアオも小規模ながらタヒチと同じ運命を辿りだした。一方基地の見返りに島民にとってタヒチではえられない賃金で軍に雇用される外、政府から経済援助を受けた。コプラの買上げを市場価格の倍近くにして島民たちの現金収入の増加がはかられた。しかし人口の流出は続いた。ハオ、ムルロアの基地で働く者、核実験を恐れて家族ぐるみ移住したケースなど様々である。

一方タヒチからの物資の輸送は軍の協力でタヒチと等価格で輸入物資が入手できた。在島者は従来にみない経済的に豊かな生活がおくれ、生活水準が上った。20年前にレアオ島民が外来者に示した卑下や劣等感、強い人見知りの態度は老若男女問わずもはや見られなかった。島の経済状況が変わるや親族間の連帯が崩れてしまった。椰子の木の生えている土地で共有地の多くは分割されていた。ある者が家を建てる時、彼の親族メンバーが協同労働に参加するのが常であったが、今日では親族メンバーとはいえ賃金を受け取る契約型が多い。魚群のやってくる季節にも島民の漁撈での協同作業は見られず、四輪車でかけつけた一部の人びとが魚をとらえ島民たちに現金で売りさばいていた。何事にも現金が請求される社会に変っていた。我々の調査中もインフォーマントは現金収入目当ての仕事であるため多少の問題があった。口碑伝承についてえられた情報の中には他島のものが語られていたり、即席にできたものもあった。レアオの人びとは伝統も文化遺産にも愛着はおろ

か、関心すらなくなっていた。レアオの過去の文化を求めている我々に対して情報を売るというビジネス・レベルでの協力しかえられなかった。ethnic identity を保たせる言語すら失くしてしまい、第三の民族への道を人種的にも文化的にも歩んでいるのである。タヒチ人に憧れを抱いてきたレアオの人たちは、20年前のタヒチ人と正しく同じであった。

東ポリネシアは巨石文化の遺跡が多いが、レアオでは36か所に50余りの石造建築物マラ



Tohoranui のマラエ

エが確認された。マラエの名前は中年以上の人たちに思い出された。descent groupがそれぞれ持っていたマラエは宗教儀礼がおこなわれる神聖な場所であった。しかしマラエの大部分は自然の力やキリスト教に改宗した島民の手で破壊されていた。マラエの石 coral slabは教会の礎石に運ばれたり、水路や礁湖^{バス ラグーン}に作る生簀や井戸作りに利用されていた。

伝統や情緒は初期に居住した土地で生まれ、又物語は部族の名門に関連があった。マラエの破壊、つまりポリネシア人の神々の死は、伝統の破壊、ひいては社会の解体を意味した。強烈な勢いで入ってきたキリスト教には同胞愛の代りに人種上の不寛容や苛責なき迫害がみられた。小さな島社会ですらキリスト教に改宗しない者や教義にそぐわぬ者に対する制裁や不寛容は厳然と存在しているのを我々は目のあたりにした。しかし、一方ではレアオの如き孤立した島社会では、教会は信仰や宗教活動に限らずコミュニティ活動の中心である。日曜の礼拝は盛装した島民の社交の場でもあった。しかしながら若者の足は教会から遠のいてきた。文明社会では重心は段々宗教から経済に移ってしまっている。人にとってお金は目的への手段ではなく、目的そのものとなった。レアオ社会においても社会・経済の変化は、重力の中心を占める宗教をゆさぶっているといえる。孤立していた小さな島社会では、一旦異文化を受容するや呆気なくポリネシアの神々は姿を消した。これは

ポリネシア文化の死につながっていた。レアオでは今や民族の伝来の慣習や技術は捨て去られ、人びとは二流三流の西欧文化に憧れ、甘んじている。彼らはポリネシア人としての自己の identity を失くしてしまった。レアオ人からツアモツ人に、そしてタヒチ人へと異文化との接触毎に identity が変わっていった。太平洋を征服した勇敢な航海民族ポリネシア人の気骨を失くし、第三の民族がこの小さな島でも生まれつつある。マオリ人、ハライ人、タヒチ人と同じ運命である。C.レヴィーストロースが来日講演で話したことであるが、10年後、20年後、1世紀、あるいは2～3世紀あともかもしれないが、これらの人びとが我々と同じように自らの根源、ルーツとの接触をとり戻す必要、自分たちの過去を再発見する必要があるであろう。遠い将来レアオの人びとが独自の人間性がどのようなものかはっきりさせようとしても、もはや彼らの社会で求めることができない。求めるものを見出すのに我々のレアオ島での仕事がささやかながら貢献するであろう。自治政府に入った仏領ポリネシアのタヒチでタヒチ人指導者たちは、先づ風前のともしびとなったタヒチ語の復活に懸命になっているのであった。

終

註1 Marcel Mauru の祖母は1934年、Peter Buck のマンガレヴァ島調査時におけるインフォーマントであった。彼は祖母から口碑伝承を聞いていた。彼は数少くないマンガレヴァ語の話せる人であり、チャントの分類も翻訳も出来た。

註2 Peter Buck によると、ハワイキとは太平洋の中心を最初に見つけた人びとの先祖がそこからやって来た、遠い故郷を象徴する言葉である。ハワイキからポリネシア人の先祖は昇りゆく太陽のあとを追って船出したのであったが、又ハワイキへと、死者の霊は太陽の沈みゆく彼方に帰ってゆくといわれる。

参 考 文 献

- Barrau, J.
1961 *Subsistence agriculture in Polynesia and Micronesia*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin no. 223, Honolulu.
- Beechy, F.W.
1831 *Narrative of voyage to Pacific*
H. M. S. Blossom in the year 1825-28. 2 vols, Colburn and Bentley, London.
- Bodin, H.
1932 *L'agriculture, époque moderne des Tuamotu*. Bull. de la Société d'Etudes Océaniques 5, Papeete.
- Buck, P.
1938 *Ethnology of Mangareva*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin no. 157, Honolulu.
1939 *Anthropology and Religion*. Yale University Press, New Haven.

- 1959 *Viking of the Pacific*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Burrows, E. G.
 1933 *Native music of the Tuamotus*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin no. 109, Honolulu.
- Caillot, A. C. E.
 1910 *Histoire de la Polynésie orientale*. Ernest Leroux Editeur, Paris.
 1914 *Mythes légendes et traditions des Polynésiens*. Ernest Leroux Editeur, Paris.
 1932 *Histoire des religions de l'archipel Paumotu*. Librairie Ernest Leroux, Paris.
- Cayet, O.
 1972 *La flore terrestre, la faune aviaire. Le monde vivant des atolls, Polynésie française*. La Société des Océanistes, Paris.
- Dening, G. M.
 1963 The geographical knowledge of the Polynesians and the nature of interislands contact. *Journal of the Polynesian Society Memoire no. 34*
- Dumond d'Urville, J. S. C.
 1841-46 *Voyage au Pôle sud et dans l'Océanie sur les Corvittes*. 3 vols, Paris.
- Elbert, S.
 1967 The fate of poetry in a disappearing culture. *Journal of American Folklore* 80.
- Emory, K.
 1934 *Tuamotuan stone structures*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin no. 118, Honolulu.
 1947 *Tuamotuan religious structures and ceremonies*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin no. 191, Honolulu.
 1975 *Material culture of the Tuamotu archipelago*. Dept. of Anthropology, Bernice P. Bishop Museum, Honolulu.
- Finney, B.
 1965 *Polynesian peasants and proletarians*. Journal of the Polynesian Society Reprint Series no. 9, Wellington.
- Haddon, A. C. & Hornell, J.
 1936 *Canoes of Oceania*. Bernice P. Bishop Museum Special Publication no. 27, Honolulu.
- Hatanaka, S.
 1977 プカルア環礁における居住と人口動態
 季刊人類学 8 卷 1 号、講談社、東京
 1978 *A study of the Polynesian migration to the eastern Tuamotus*
 -preliminary report- The University of Kanazawa.
 1980 レアオ島とチャント
 歴史的な文化像—西村朝日太郎博士古稀記念
 蒲生正男他編、新泉社、東京
 1981 *Reao Report—a study of the Polynesian migration to the eastern Tuamotus*—
 The University of Kanazawa
 1981 島嶼国における近代化と文化遺産（地域研究 I：オセアニア）,

金沢大学文学部論集—行動科学編—第2号

Metraux, A.

1940 *Easter Island.*

Bernice P. Bishop Museum Bulletin no. 160, Honolulu.

Oliver, D. L.

1962 *The Pacific Islands.* Doubleday Anchor Book, Harvard Univ. Press, Cambridge.

Ottino, P.

1965 Ethno-histoire de Rangiroa. *Provisoire de O.R.S.T.O.M.*, Papeete.

1967 Early 'ati of the western Tuamotus. in *Polynesian culture history: essays in honor of K. Emory*, ed. by A. Howard et al. Bernice P. Bishop Museum Special Publication no. 56, Honolulu.

Seurat, L. G.

1905 Les engins de pêche des anciens Paumotu, *L'anthropologie* XVI, Paris.

Légende de l'île Reao, *Revue des Traditions Populaires* Tome XX no. 12, Paris.

L'archipel des Tuamotu et ses habitants moeurs des anciens Paumotu, *Revue Coloniale*, Paris.

Stimson, F.

1964 *A dictionary of some Tuamotuan dialects of the Polynesian language.*

ed. by D. Marshall, Peabody Museum & Het Koninklijk Inst, The Hague.

Thomson, W. J.

1889 Te pito te henua (Easter Island), *U. S. National Museum Annual Report*, Washington.

Wilkes, C.

1856 *Narrative of the U. S. Exploring Expedition 1838-42.* 5vols, New York.